ISSN 1345-0379

KOTOBA NO UMI

ことばのうみ

宮城県図書館だより

MIYAGI PREFECTURAL LIBRARY No.13 2003. 3

春風も外山のおくも雪消えて
のどけき空に帰る雁がね

伊達　政宗

雪解け水が大地を潤し、森羅万象躍動する季節を迎えました。紫山の草木も一斉に萌え、小鳥たちの恋のささやきが聞こえる季節です。身近な山野を訪れ、しばし大自然の一員としてあるがままの自分を取り戻す、そんな一時を過ごされてはいかがでしょうか。

特集 図書館サービスQ&A

読書の時間

恩田　陸

読書とは、突き詰めていくと、孤独の喜びだと思う。人は誰しも孤独だし、人は独りでは生きていけない。矛盾しているけれど、どちらも本当である。書物というのは、この矛盾がそのまま形になったメディアだと思う。読書という行為は孤独を強いるけれども、独りではなしえない。本を開いた瞬間から、そこには送り手と受け手がいて、最後のページまで双方の共同作業が続いていくからである。本は与えられても、読書は与えられない。読書は限りなく能動的で、創造的な作業だからだ。自分で本を選び、ページを開き、文字を追って頭の中に世界を構築し、その世界に対する評価を自分で決めなければならない。それは、群れることに慣れた頭には少々つらい。しかし、読書が素晴らしいのはそこから先だ。独りで本と向き合い、自分が何者か考え始めた時から、読者は世界と繋がることができる。孤独であるということは、誰とでも出会えるということなのだ。

（おんだ・りく　作家）